

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

<b>Title</b>	(第 3 章)阪神虎舞みんぱく公演(2021)
<b>Author</b>	吉田 憲司, 寺村 裕史, 日高 真吾, 橋本 裕之, 中川 眞, 菊池 忠彦, 金崎 亘, 笹山 政幸, 山本 和馬
<b>Citation</b>	URP 「先端的都市研究」 シリーズ. 29 巻, p.43-65.
<b>Published</b>	2022-03-15
<b>ISBN</b>	978-4-904010-44-0
<b>Type</b>	Book Part
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学都市研究プラザ
<b>Description</b>	阪神虎舞の誕生：被災地芸能の文化的脈絡の拡張
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20220516-054

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

## 第3章

### 阪神虎舞みんぱく公演（2021）

吉田憲司（国立民族学博物館館長）、寺村裕史（国立民族学博物館准教授、司会）、日高真吾（国立民族学博物館教授）、橋本裕之（大阪市立大学特別研究員）、中川眞（大阪市立大学特任教授）、菊池忠彦（大槌城山虎舞総会長）、金崎亘（大槌城山虎舞）、笹山政幸（特別展実行委員）、山本和馬（阪神虎舞）



座談会〔日時：2021年3月6日、場所：国立民族学博物館（オンライン配信）〕  
（写真提供：国立民族学博物館）

#### はじめに

吉田：皆さん、こんにちは。館長の吉田憲司です。今日はようこそ私どもみんぱく、国立民族学博物館の虎舞公演にお集まりいただきましてありがとうございます。この公演は現在みんぱくで開催しております特別展「復興を

支える地域の文化—3.11から10年」の関連公演として実施するものです。

東北地方太平洋岸をあの巨大津波が襲った東日本大震災からちょうど10年がたちました。あの日、私は前の晩に宮古に泊まっていて、朝、宮古を出て北の久慈にたどり着いたところで地震に遭いました。その後、盛岡へ移って数日間避難をしておりました。帰阪した後、この未曾有の災害に当たって、被災地から離れたこの大阪で、自分がそして自分が所属している博物館にいったい何ができるのかというのをずっと自問しておりました。震災の直後、地域コミュニティーの存続自体が危ぶまれるなかで、芸能とかあるいは祭りを開いているところではないという声も聞かれましたけれども、実際には被災地ではその年、例年以上に祭りが活発に行われました。私も震災の3カ月ほど後、7月に開かれた「釜石夏の港まつり」で、瓦れきの山の間で虎舞が次から次へと演じられていく様子を目にしました。それは人々が祖先から受け継いできた芸能、有形無形の文化遺産というものの持つコミュニティーの存続、そして人間の生存、生にとっての核心的な意義、かけがえのない重要性を改めて認識させられる出来事でした。

その虎舞が2018年、神戸に移植されました。指導に当たられたのは岩手県大槌町の城山虎舞の皆さんです。その虎舞が、今日パネリストとしてお越しいただいている橋本裕之さん、そして中川眞さんのご尽力によって、関西在住のコンテンポラリーダンサーたちの手で演じられるようになったわけです。現代において希有な、極めてまれな出会いと言うべきものですが、考えてみますと日本中に点在している芸能、特に神楽の多くは山伏や伊

みんぱく 研究公演  
Hanshin Tiger Dance Performance in Minpaku  
特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」関連  
阪神虎舞  
みんぱく公演  
2021 3/6 SAT. 13:20 — 15:00 (開場 12:50)  
【場 所】 国立民族学博物館 前庭  
【参加費】 無料  
【申 込】 事前申込不要  
国立民族学博物館  
National Museum of Ethnology  
祝賀  
2021年3月6日(土) 13時20分～15時00分  
会場：国立民族学博物館 前庭

勢大神楽の手で各地に広められたものです。ですから阪神虎舞の誕生というのは、まさに芸能の誕生の真正の、正当な展開というのを現代において実現したものだと思います。

今日はコロナ禍ということもあって、虎舞を実際にこちらみんぱくで皆さんにごらんいただくことができません。そこで、阪神虎舞の皆さんには先日みんぱくにお越しただいて、みんぱくの各所で舞っていただいたときの映像をごらんいただいた上で、「芸能を移植する——阪神虎舞の試み」と題して、みんぱくの日高真吾教授のコーディネートのもとの、橋本裕之さん、中川眞さんを初めとして、阪神虎舞の山本和馬さん、大槌城山虎舞の菊池忠彦さん、金崎亘さん、そして釜石の南部藩壽松院年行司支配太神楽の継承者で、みんぱくの被災文化遺産所在調査専門調査委員でもある笹山政幸さんとで座談会を開いていただきます。

災害が生み出した東北と関西の新たな結びつき、きずな、大震災から10年というこの節目に当たって災害の記憶と私たちがどう向き合っていくのかを語り合ってください。最後までどうぞよろしく願いいたします。  
**寺村**：続きまして大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員であり、坐摩（いかすり）神社の権禰宜でもいらっしゃいます橋本裕之さんより、阪神虎舞について解説をしていただきます。橋本さんは、みんぱくが長年行ってきたさまざまな被災地支援のうち、特に郷土芸能の支援にご協力いただくとともに、阪神虎舞設立のキーパーソンでもあることから、阪神虎舞の設立の経緯も含めてお話させていただきます。

## 大槌城山から阪神へ

**橋本**：今、ご紹介いただきましたが、現在大阪の坐摩神社で権禰宜としてご奉仕しております。阪神虎舞は2018年11月に神戸の新長田で結成されました。東日本大震災で被災した芸能を遠く離れた関西に移植することで、災害の記憶が風化することに抵抗する。それが目的でした。チラシにちょっとすかしたプロフィールが書いてあります。ホームページにも出ているんですが、読ませていただきます。「岩手県沿岸部に伝わる芸能「虎舞」を関西在住のコンテンポラリーダンサーたちが演じる。そ

これは2011年の東日本大震災がもたらした奇跡の邂逅だった。2018年、神戸市の新長田を拠点として結成。大槌町の大槌城山虎舞に学び、インスパイアされた阪神虎舞の演舞は、芸能の根源と未来に向かう可能性を示唆するだろう。女性の舞手を擁する唯一の虎舞団体として、オリジナリティあふれる演目を創作するべく奮闘中。」かなり盛っていますけれども、これに尽きるわけです。

設立の経緯をお話ししていきますと、私は震災当時、岩手県の盛岡大学で教えていて、岩手県の文化財保護審議委員を務めておりました。震災後は日本財団の伝統芸能復興基金をはじめとして各種の団体からの支援を仲介する中間支援を通して、被災した各地の郷土芸能の支援に奔走してまいりました。それは岩手県の沿岸部の郷土芸能が人々の生きがいや喜びとして享受されていて、地域社会を再生させるために欠かせない要素の一つであり、そこで生きる人々にとって精神的な支柱として存在している。その消息に気づかされたからでした。

城山虎舞とも縁の深い釜石市の尾崎町虎舞に岩間敏行さんという方がいるのですが、彼が言った言葉を紹介させてください。私が書いた本を読ませていただきますが、彼は「釜石に住んでいるから虎舞をやっているのではない。虎舞をやっているから釜石に住んでいるのだ。虎舞がなくなったら釜石にはもう住まなくなる。」というようなことを言っていました。私は意表をつかれて、その力強い言葉にかなり狼狽しました。私たちはどうしても地域社会が存在するから祭りや芸能が演じられると考えてしまいがちです。ですが、岩間さんは祭りや芸能が演じられるから地域社会が存在すると言っていたのです。私は祭りや芸能が地域社会を維持する紐帯として働くだけではなくて、地域社会を再生させる原動力としても働く可能性を秘めているということのある意味はじめて思い知らされたわけです。

こうした支援の過程を通して次第に一緒に奔走するようになったのが、自身も釜石の年行司太神楽において要職を務めておられる笹山政幸さんでした。笹山さんは今回の展示でも紹介されていますけども、三陸沿岸を巡行する普代村の鶴鳥神楽の釜石における宿主を務めておられ

て、ご息は鶴鳥神楽の若きリーダーです。そして私自身も神楽子として参加しているので、幾重にも深いご縁がありました。実際には各団体が用具や装束、そして用具や装束を保管したり練習したりする空間を整備する資金を助成することのみならず、各地において被災地の郷土芸能に関する公演を企画するようなことも手がけました。

その最初期に出会ったのが大槌町の城山虎舞だったんですね。虎舞、これは岩手県をはじめとして三陸沿岸に数多く伝承されている郷土芸能です。虎は一夜にして千里行って千里帰るという伝承があることから、三陸の漁師たちが航海安全の守り神として崇敬してきました。虎舞は祭りや祝いの場で演じられてとても人気があり、大槌町だけでも5団体あります。釜石市だと何と14団体もあるんですね。その中でも城山虎舞は平成になってできた新しい団体ですが、人気が大変高くダイナミックかつ繊細な演技でとてもよく知られています。そして東日本大震災以降は、復興のフロントランナーとしてがむしゃらに突っ走ってこられました。

2013年に開催された、いわて三陸鎮魂復興祭というイベントがありまして、そこで私は城山虎舞にトリをお願いしたのですが、そのパンフレットにこんなふうに書いています。ちょっと読ませてください。「平成23年3月、東日本大震災によって会館・山車・道具・衣装などを失ったが、各種の支援を受けながら活動をいち早く再開して、復興を牽引するフロントランナーとして人々を力強く鼓舞してきた。平成25年9月、新調した山車の入魂式と落慶記念祝賀会を開催して意気が上がる。」これが2013年のことなんですけども、この時は会場になった浄土ヶ浜で、日本財団の支援を得て新調した山車を何とクレーン車で運び込んで演じてくださいました。そういう気概のある、メンバーは男性ばかりという硬派の団体です。

でも実はこの虎舞、ここ大阪の地に始まります。江戸時代の中期に三陸の豪商である吉里吉里善兵衛が江戸で近松門左衛門の「国性爺合戦」を見ます。そこで和藤内の虎退治の場面に感銘を受けて、配下の船頭たちに演じさせます。こうした現象は全国各地で起こったようで、全国に

虎舞が伝承されています。この「国性爺合戦」は実は大阪で初演されているので、阪神虎舞はある意味、虎舞発祥の地、本貫地に戻ってきたとも言えるかもしれません。

今、全国各地で自然災害が起こっています。そしてコロナ禍。東日本大震災から10年がたち、記憶の風化は深刻です。当初は各種の助成金もありました。被災した郷土芸能の公演も各地で企画されましたが、遠く離れた関西に暮らしていると、もう思い出す機会も少なくなっています。

そこで私はインドネシアのジャワ島地震によって被災したガムランを支援してきた民族音楽学者の中川さんとともに、岩手県沿岸部の郷土芸能のシンボルとも言える虎舞を関西に移植することを考えました。実際は中川さんと会話している中で、中川さんがふと口にした、ただの思いつきでした。被災地に行ったり被災地の芸能を呼んだりすることが難しくなっているのであれば、行ったり来たりしなくても忘れないで済むように、関西でつくったらええんちゃうかというような話をしていたわけです。だって関西人は虎がみんな大好きですから。

もちろんこれは頭でっかちの思いつきにすぎませんでした。いざ動いてみるとそのような活動を担ってくださる団体にも個人にもなかなか出会えませんでした。結局、移植するのであれば城山虎舞しかないと思って、総会長の菊池さんをお願いしました。城山虎舞はド迫力というだけではなく、演技も演奏も水準が高過ぎて、通常の郷土芸能のイメージをはるかに超えるものでしたが、幸いにも快諾を得ました。そして、以前も鶴鳥神楽の関西公演を引き受けてくださった、新長田に拠点を置くNPOのDANCE BOXを頼って、2回のワークショップを企画して、DANCE BOXに縁のあるプロのコンテンポラリーダンサーや俳優に参加してもらったわけです。

今日もZoomで参加してもらっている金崎亘さんを筆頭にして、真太郎さん、金崎晃洋さん、そして健太さんという城山虎舞の若手の四天王に2回にわたって新長田に来てもらい、指導してもらいました。大変だったけれども、とても楽しかったです。菊池さんたちには私が至らなく

てご迷惑もおかけしてきたので、おわびしたいという気持ちもたくさんありますが、実は私たちはまだ笛も太鼓もなく、不完全な状態です。城山虎舞の水準に及ぶべくもありません。ですが、城山虎舞の総会長の菊池さんや会長の坂本さんたちは、自分たちと同じことをするだけじゃなくて、オリジナリティを持って活動してもらったらいいよと言ってくださっています。

何度か指導してもらっただけで弟子を名乗ることができるはずもないので、言ってみれば私たちは城山インスパイア系虎舞、そういう感じですかね。ですから阪神虎舞には女性の舞い手もいます。雌虎ですね。大槌でも釜石でも山田でも、最近では虎舞に女性が参加している団体が多いですが、それでも女性は笛や太鼓を担当していて、女性が虎を舞う団体は私の知る限り存在しません。そうしたことも許してくださっています。また、コンテンポラリーダンサーが中心の団体ですので、そういうコンテンポラリーダンス的な要素も今後はありうるかなと思ったりもしております。いずれにしても、震災から10年、皆さんは今日、被災地の郷土芸能に触発されて、阪神虎舞が新しい郷土芸能として生まれて、そして大きく羽ばたいていく、その場に立ち会ってくださっているんだろうと勝手に思っております。

それでは今からごらんいただきたく、演目の紹介をさせていただきます。1曲目は「遊び虎」と申しまして、ゆったりとしたテンポで春の日差しを浴びた虎が遊び戯れる様子を表現しております。2曲目は「跳ね虎」、これはアップテンポで獵師に追われた手負いの虎が暴れ狂う様子を表現しています。最後の3曲目が「笹喰み」と申しまして、これは虎舞最大の見せ場で、クライマックスに当たるわけですがけれども、虎が笹で牙を磨き爪を研ぐ、そういった様子を表現しております。この3曲をまず前半にごらんいただきます。

その後、私たちで座談会をさせていただきますして、座談会の後、阪神虎舞のオリジナルを披露いたします。これは西アフリカのトーゴ出身でありサポートメンバーのアラン・シナンジャが叩くモバギガンネという太鼓に合わせて、即興の虎舞を演じます。それではちょっと長くなって



しまいましたが、早速虎舞の公演をごらんいただきたいと思います。どうもありがとうございました。

寺村：橋本さん、どうもありがとうございました。それでは早速、阪神虎舞の演武、収録映像ですけれども「遊び虎」「跳ね虎」「笹喰み」の三つを続けてごらんください。

#### (映像)

日高：皆さん、こんにちは。それではこれから国立民族学博物館の日高が座談会「芸能を移植する——阪神虎舞の試み」ということで、進めさせていただきます。改めましてよろしくお願いたします。

最初に登壇いただいている皆さんを簡単にご紹介していきます。まず、橋本裕之さん。大阪市立大学の都市研究プラザ特別研究員をされております。そして現在、坐摩神社の権禰宜を務められておられます。橋本さんは東日本大震災後、三陸沿岸部で被災した郷土芸能の支援を積極的に展開してこられました。そしてみんぱくが行ってきた被災地支援の中でも、特に郷土芸能について、これまでサポートをしていただきながら、本当に力をかしていただきました。私自身もこの十年間、本当に橋本さんとさまざまな活動をさせていただきました。私はもともと有形の文化財の保存を専門としていますが、無形の保存について、橋本さんからいろいろと勉強させていただきました。今回は阪神虎舞を紹介する公演になっておりますが、その阪神虎舞に関西に移植する企画を立ち上げて、実現に結びつけた重要なキーパーソンであるので、今回お越しいただいております。いつもながらですが、本日もよろしくお願いたします。

次に中川眞さんです。大阪市立大学都市研究プラザ特任教授を務められております。中川さんは、音楽学をベースにさまざまな音楽表現を展開していることが、ホームページ上でも見られます。あらためてそちらもご覧いただければと思います。中川さんも阪神虎舞の移植プロジェクトに大きな役割を果たされてきました。2017年に大槌の城山虎舞にみんぱくに来てもらったとき、中川さんにもご登壇いただいて、パネルディスカッションを行っ

た際、この虎舞を関西の地に移植してみてもどうかという壮大なプランをご提案いただきました。当時は「ほんまにできるんかいな」と思いながら聞いていたのですが、「ほんまにできてもうた」というところで、今、改めて驚いているところです。

次に山本和馬さん。関西を中心にコンテンポラリーダンサー、振付家として活躍されておられます。今回は阪神虎舞のメンバーということで、登壇をいただいております。先ほど見ていただいた映像もそうなんですけれども、今回、山本さんにはみんぱくにお越しいただいて、この虎舞を収録した形で皆さんに見てもらうために、いろいろと相談に乗ってもらいました。今もそうですが、私たちは、人前で演じたりお話しさせてもらったりすることは、かなり場を踏んでいるんですけれども、どういうふうに見られているのかわからないこの状況で、こういう座談会をするというのはとても緊張しますし、パフォーマンスをするのも非常にイメージが湧きにくいということで、打ち合わせを重ねてきた次第です。そして、最高のパフォーマンスを皆さんに見てもらうために、収録をして、番組をつくってきました。実際の収録でもとてもご尽力をいただきました。ありがとうございます。また後ほどコメントをいただきたいと思いますのでよろしく願います。

次に金崎亘さん、岩手県大槌町の城山虎舞のメンバーで、先ほど橋本さんからの話もありましたように、実際に関西に来ていただいて、先ほどの山本さんたちに虎舞を教えてくれた、重要な先生役という役割を果たしてられました。

次に笹山政幸さん。笹山さんも東日本大震災後、被災地の芸能支援のあり方について、みんぱくにもさまざまな助言をいただいた重要なキーパーソンです。今回、特別展の方でも紹介しておりますが、釜石市の南部藩壽松院年行司支配太神楽の継承者でもあります。今回の特別展の第一章では、郷土芸能の持つ力というコーナーを設けています。そこで先ほど言いました南部藩壽松院年行司支配太神楽、そして城山虎舞、そして鶴鳥神楽の着つけ指導を笹山さんにはいただきました。わざわざ岩手から来て指導いただいたり、あるいは仕上げのところは Zoom、本当に Zoom であんなことができるんだなというのが今回、新しい経験だったんですけれども、着つけ指導をい

いただきました。非常におもしろい芸能のコーナーになっていますので、皆さんが展示場にお越しいただいたときには、楽しんでいただければと思います。

そしてスペシャルゲストということで菊池忠彦さんにもお越しいただいております。先ほど橋本さんのほうからもご紹介いただきました城山虎舞の総会長ということで、現在は大槌町の町議会議員を務められておられます。2017年に行った企画展「津波を越えて生きる一大槌町の奮闘の記録」という関連イベントで、「城山虎舞 in みんなく」という企画に出演していただき、ディスカッションにもご登壇いただきました。そして、阪神虎舞の移植プロジェクトにも力強くバックアップいただいております。菊池さん、ありがとうございます。

それでは早速、本題の座談会「芸能を移植する——阪神虎舞の試み」について、皆さんの話を伺っていきたくと思います。本当にこのコロナ禍というのは私たちの生活に大変な影響を及ぼしておりまして、みんなくの活動もそうですけれども、さまざまな文化活動が大きな影響を受けております。阪神虎舞のほうの活動についても、いろいろなことが起こっているのではないかと思いますけれども、現在の阪神虎舞の活動状況について、橋本さん、教えていただけますでしょうか。

## 芸能の移植

橋本：もちろんコロナ禍で予定されていた公演が結構というか、ほとんどできなくなってしまった状態です。今回のみんなく公演が本当に久しぶりで、フルメンバーでそろってやったのは1年近くなかったのかなという話をみんなですしていました。コロナ禍のことは置いておいて、基本的にどういう活動をしていて、これからもしていこうと思っているかをちょっとお話ししたいと思います。私たち阪神虎舞は、阪神淡路大震災の被災地である新長田に拠点を置いていますから、やはり被災地同士の交流、大槌と新長田が交流するという物語を思い描いています。ですが何よりも、先ほどもちらっと言いましたが、関西ではみんな虎が大好きですよ。なので、これは夢なんです、いつか阪神甲子園球場で楽天

と阪神の交流戦の時に披露したいとずっと言っています。そういう壮大な野望も込めて、阪神虎舞と名乗ってさまざまな機会に演じているということです。

具体的に言うと、結構いいところまで来ていまして、阪神タイガースが必勝祈願をする廣田神社で奉納させていただいています。ちょっと宣伝しますと、今年も4月16日10時から廣田神社の春祭りで奉納させていただきます。廣田神社からご依頼をいただきました。また大阪では、虎の縁起物で知られる少彦名神社という有名な神社がありますが、そちらでも奉納させていただいて、少彦名神社はもう大阪におけるホームグラウンドだと思っています。

来年は寅年ですからもっといろいろなチャンスがあるかなと思っています。でも、もしも阪神タイガースの関係者がこの様子をごらんになっていたら、ぜひご検討いただきたいとか、宣伝しておきます。それだけではなくて、もちろん新長田の地域コミュニティ、ご近所のお祭りに結構呼んでいただいているんです。これはメンバーがいろいろな個人的なつながりもあり、そういうところからお声がけをいただいて、先ほども申しましたとおり、新しい郷土芸能として新長田に根づいていけたらいいと思っています。それをまさしく記憶の風化に抵抗する試みとしてやっていきたいと思っています。

宣伝じみてしまいますが、4月3日に新長田のDANCE BOXで、虎舞の稽古を公開します。それは何を隠そう新メンバー募集みたいな側面もありまして、午後1時から4時、DANCE BOXで稽古を実施します。阪神虎舞のFacebookやDANCE BOXのホームページでも近日公開という感じで、もう少し具体的になってきましたらご披露できるかと思うので、ぜひ皆様お運びいただきたいと思います。

それからもう一つだけ付け加えておきますね。阪神虎舞は記憶の風化に抵抗する試みとしてやっているんですけれども、きっと城山の皆さん、亘さんたちもそうだと思うんですが、こちらのメンバーもとにかく虎舞が好きみたいです。すごく好きみたいです。大変きついのですが楽しいみたいで、そういうのが根っこにあってみんな頑張ってるってやってくれてい

るというのが現状ですかね。そのあたりの気持ちに関しては、山本さんがご本人ですので、お話しいただけるかと思えます。

**日高**：記憶の継承というのは、震災から大きなテーマとして、我々のなかでもいろいろ議論してきましたが、こういう形で芸能が移植されるということで記憶をつなげていく試みが、これからどう展開していくのかについては、いろいろと注目していきたいと思っております。また新メンバーも募集されるということですが、本当に見ていると大変ですよ。あのステップワークであるとか、柔軟性であるとか、足を手に見せなきゃいけないとか。先ほども山本さんと、城山虎舞の人たちは普通に演舞に入っていっちゃんから準備とかどうしているんだろうねという話をしていました。ぜひ、いろいろな人に参加してもらって、阪神虎舞を盛り上げていただけたらと思います。

それでは次に、中川さんにお話を伺いたいと思います。阪神虎舞をこうした形で移植するということが、非常に重要な役割を果たされてこられています。実際、近くで見られて、どうでしょうか。このバックアップをしてきて阪神虎舞、ここまでいろいろなものを高めてきた状況があると思うんですけれども、その点についてのコメントをいただけたらと思います。

**中川**：郷土芸能というのは、大体担い手が地元、地域の人が基本なんです。それで地域の人たちの地元の幸福を願うという、ある意味では非常にクローズドな構造を持っていると思うんですけれども、阪神虎舞はよそ者がやっているわけです。そういう意味では、クローズドの反対でオープンというか、開放形の芸能としてある。そこがすごくおもしろいし、魅力的だなと思ってます。ひょっとしたら大槌の本家の方々が予想もしないような展開になるかもしれないけれども、でも同時にそのとき、城山あるいは大槌と阪神の間に、ある種の緊張状態が生まれる可能性もありますね。でもそのテンション、緊張がポジティブな、創造的なものにつながってほしいと思っています。

虎舞本家のほうは、そもそも航海の無事安全の祈願なんですよね。では阪神虎舞の持ち味は一体何だろうということで、橋本さんもちょっと触れられましたが、阪神地域あるいは新長田周辺の地域社会とどのような関係を

持っていかるところあたりがキモになると思っています。例えば将来、大きな災害が阪神地域に起こるとしますね。災害があったときに何か活躍できるような文化コミュニティになってほしい。難しい言葉で言ったらソーシャル・キャピタル〔社会関係資本〕になると思うんですけど、そういうコミュニティになってほしいなと思っています。

でもこの活動を持続可能にすることがとても大事で、経済的な側面での補強がどうしても必要になってきます。言ったらなんですけど、そもそもコンテンポラリーダンサーの生活基盤は非常に不安定で、シリアスな生活面のことを考えたら虎舞活動の優先度が下がっていく可能性もあるかもしれない。それを予防するにはどうしたらいいかということも、今後バックアップというか環境を整えていく点で、とても重要かと思っています。

## 阪神虎舞の現在

**日高：**ありがとうございます。中川さんの話にもありましたが、阪神虎舞の役割、芸能の役割と言ってもいいかもしれませんが、すごい楽しみを人に与えてくれる側面というのは、みんなが集まってくる。やっている人間も楽しいし、見ている人間も楽しくなる。そういったところが、震災のような非常につらいときに、芸能がいち早く復活して、みんなが元気になっていくという力を与えてくれた。そういう、人に楽しみを与える芸能というところでも、阪神虎舞が関西の人たちにいろいろな楽しみを与えてくれる存在になってくれたらいいと思いながら、今、聞いていました。

それでは実際に阪神虎舞に指導に行かれた金崎さん、出番です。まず、映像を見た感想をいただければと思います。どうだったでしょうか。

**金崎：**頭（かしら）をもっと細かく振ったほうがいいと思います。

**日高：**なるほどね。でも結構、頭って重いんでしょう。

**金崎：**重いですよ。重いけど、大丈夫です。

**日高：**ちょっとそこで頭を振ってもらっていいですか。振れます？

**金崎：**こうなんですけど、これを生きてるふうに見せかけるんですね。生きてるふうには。

**日高：**生きてるふうにはね。でも本当、虎舞って虎が生きているみたいですが

んね。なるほど、そこら辺のリアリティさを今後、さらに高めていくということでしょうか。

橋本： どうやった？ あかんかった？ おもしろかった？ まあまあ？ どっち？

金崎： いいです、いいですよ。上手、上手。上手です。

橋本： あんまり心がこもってないけど。(笑)

金崎： マジで上手ですよ。

菊池： 思ったより上手。

日高： 菊池さん、ありがとうございます。どうでしたでしょうか。ちょっとコメントいただけますか。

菊池： すごくいいと思いますよ。思ったよりだいぶ上達しています。ゆくゆくやっぱり生で音を出してやれたら、なおいいかなという感じがしていますね。最終的に向かうところはそこなのかなと。全て自分たちで音を出して、自分たちで演出して踊りを披露するという形が、やはり最終的な目標じゃないのかなと思います。

日高： なるほど、ありがとうございます。どうでしょう、菊池さん。菊池さんたちも虎舞を学びながら、ずっと今まで活動されていますが、今回は教える側になりましたよね。教える側の立場になってみてどうでしたか。

菊池： 自分たちが教わってきたものを、あまり型にはまらないで思いっきりやってもらうということにおいては、完全な形で伝えるというのはやっぱり難しいわけですね。いろいろなこれまで来た環境というのも全然違うわけだから、その辺で、でも阪神虎舞の皆さんはすごく大槌に理解を示してくれて、まさにそこが震災の風化を郷土芸能をもってとめるといふか、防ぐという、そこにつながると思うんですね。そういう意味では我々も虎舞を教えるといふか、伝えながら、そういう気持ちを持ってやったといふのは、すごく大きい経験だと思います。若い亘君とかを初めとする健太とか真太(郎)とか、あとはアキとかあの辺のメンバーもその辺を理解して神戸に行っているんで、そこに関しては彼らが一生懸命やってくれたと思います。あとは覚えてくれた皆さんも本当に一生懸命やって。それはもう今現在も続いているんで、すごいありがたくもうれしくもあるのかなと思っています。

日高：ありがとうございます。金崎さん、パフォーマンスしているほうが楽しそうだね。

金崎：パフォーマンスしているときが一番楽しいですね。しゃべるより。

橋本：笛とか太鼓のことは本当にそう。私自身も本当は笛とかやらないといけないとっていて、ちょっと練習とかもしていたんですけどね。言いわけが、神主の勉強とかもあってなかなかできなかつたりして。だからまだ不十分なんです。今、映像の方たちがとても見事につくってくださったので、まるで生のように見てくださった方もいらっしゃるかもしれませんが、全部城山の音を使ってやっているという段階です。そこは確かに今後の課題だとあらためて思いました。頑張ります。

日高：一気にはできないでしょうからね。少しずつ積み上げていくことで持続可能になっていく部分もあるかと思いますので、そこは地に足をつけた形で頑張っていただけたらと思います。

それでは笹山さん、いろいろとこの10年間一緒にやってきまして、阪神虎舞の展開というのは、ちょっと私とかと一緒にやってきた活動とはまた全然違った切り口の展開になっていますけれども、どうでしょう。今、こうした動きなんかを見て、あるいは笹山さんがこれまでずっと芸能とかかわられてきた形の中で、感じていることをちょっと教えていただけたらと思います。よろしくお願いします。

笹山：阪神虎舞の映像を見まして、こんなにうまく伝わっているんだなというのが第一印象でした。見ているうちに笛と太鼓があまりにうまくかったので、チャットで「これ本当にやっているんですか」と入れたんですけど。だから、本当に目指すところは笛と太鼓を生でやれば、うまく伝わったすごくいい成功例になると思いますし、今の段階でもいい成功例にはなっていると思います。

私たちは東日本大震災というものを食らって、一回壊滅状態になって、中川先生、橋本先生、あとみんなの方々のご協力でいろいろな助成金を活用して復活をなし遂げました。今後起きるであろう、災害で一回壊滅状態になったときの、また立ち上がるいいテンプレートというか、ひな形はできていると思います。もちろん、時代に合わせてそれも変えていかなければと思う



んですけど、この10年やってきまして、本当にすぐでしたね。皆様のおかげで、ある程度こちらの被災地の芸能団体は必要最小限の道具はほとんどそろって、団体も復活しております。

**日高**：10年、本当にあっという間でしたけども、何か笹山さんは髪の毛を黒く染めちゃってるのであれなんですけど、みんな白髪が増えましたよね。そこだけは何か10年の経過をすごく感じるんです。先日、阪神虎舞の皆さんの、この間収録している演舞の状況を見ていておもしろかったのは、虎舞って太鼓と笛と舞い手が息を合わせながらリズムを刻んでいく印象があるんですけども、CDの音源で、舞い手がそこまで息を合わせながら舞うというのは、何か阪神虎舞の、地元でやる虎舞とはちょっと違った、太鼓や笛がないところでやる虎舞が、こういう粋な合わせ方になるんだというのは、結構新鮮でした。

そうしたところから、いよいよ山本さんに登場いただきます。結構みんないい感じで言うていただいておりますけれども、どうですか。実際に収録した映像を今改めて見て、そしてみんなのコメントを聞いていて、正直に感じたことをまず教えていただけますでしょうか。

**山本**：まずは本当にこんなに見れるものにしていただいてありがとうございます。まだまだ技術的には足りないことが多いんですけど、今後も活動を続けていき、人前で踊ることを自分たちのモチベーションとして、さらに上手になっていけるようにと思っています。この1年間はなかなかそういう機会もなかったですけど、引き続き稽古をしていきたいと思っています。音の話もさっき出たんですけど、息を合わせるというか、僕たちにとっては音がCDしかないの。だからメンバーの中でも、何分何秒からこの音が来るから、そこに合わせないとだめだよみたいな秒数で把握しちゃっているし、全部カウントで分解しちゃって、何カウント目でこれが来るからこのステップでみたいな感じで。そこに向かってつくり上げているという感じになっています。

**日高**：なるほど。そうやって合わせていっているんですね。なかなかできないですよ。橋本さんなんかは、できますか。そういうきちっと数えて、決まった動きができるということ。

橋本：何でいきなりディスってくる。(笑)

日高：あまり僕ら研究者が得意じゃないよなと思いながら聞いていたので。

橋本：挫折しています。

日高：学ばないといけませんね。

橋本：笹山さんとか何でもできちゃうからいいんだけど、できなくてごめんなさいという感じ。本当は笛とかこっちでやれるようになっていれば、違うんだらうね。今のカウントを合わせてやっているというのは、おもしろくなくなっちゃうから、もっといろんな柔軟なパターンで対応できるようになっていたほうが、パフォーマンスとしてもはるかにキャパが広がりますからね。

山本：やっぱりその場のパフォーマンスになって、もうちょっとやりたいといったときも、だんだん音のケツが迫ってくるので。さっさと帰らないといけなくなるときは、すごく切ない感じで帰りますね。

日高：なるほど。その時間のとり方の余裕がなくなるというのは、そういったところがあるんですね。

橋本：だから大槌の祭りに行って、小鎚神社の境内でなさっている時に、本当に場自体がわーっと盛り上がってくるから、ずっとやっているわけじゃないのに、ずっとやっているかのように感じるぐらい、濃密な時間が流れますよね。そういうふうに見える条件を私たちまだ持っていないですよ。

日高：なるほど。それでは中川さん、なかなかパフォーマンスがみんなの前でできなくなってしまうというコロナ禍の状況になっているんですけども、何か中川さんのこういうやり方あるんちゃうみたいなってありますか。

中川：実は去年の10月にダンサーの皆さんにインタビューしたんですよ。すると、できないのはつらいけども何かいろんなことが考えられて、自分の体もリセットして、マインドもリセットできるんで、すごくいい時間でもあるということを知っていて、これはある種、充電期間なのかなと思いました。こういう芸能というかダンスは生でないといけないっていうところがダンサーにもあると思うんですが、今回のようにオンラインで映像化というのも

とても大切に、こんなにすばらしい映像をつくってくれたのは、すごくうれしいです、でもね、何回見ても一緒に映像なので、それとは別にいかにしてライブの環境をつくっていけるのかということ、シンプルですけども考えていくことが大切かなと思います。

**日高**：そうですね。ライブ感って、特に芸能なんかというのはとても大事で、そこに集まってきている人のパワーも含めての芸能だと思いますので、そういう環境がどうやったらつくれるのかみたいなことは、何かご助言いただけますか。

**中川**：芸能やこういうパフォーマンスは、鑑賞しているのは人だけじゃないということですよ。地面であり、場所であり、空であると。そういうものに対しても何かメッセージみたいなものを出していると思うので、それが映像ではなかなか達成できない。つまり人間も動物も植物も空気も何もかも、あらゆるものを含めたスペースというか空間の中でやって、音が震える、空間が震えてくるみたいな。それをダンサーが一番求めているのじゃないかなと思いますね。

去年京都で1000人以上のアーティストにアンケートをとったんですよ。コロナ禍をどのように思っているか。作品発表に関して、オンラインでやっていきますかという質問に対して、演劇では40%、音楽では60%の人がオンラインでもいいですよと回答しました。美術も多い。でも、ダンサーだけがものすごく低く、10%くらいでした。やっぱりダンサーの人ってオンラインにはちょっとネガティブというか、むしろライブでできること、そっちのほうを最大限に考えてるんでしょうね。映像の人には申しわけないんですけど、そういうダンスの特別な性格みたいなものもあるかなと思います。

## 芸能の継承

**日高**：金崎さん、今、練習とかしているんですか、虎舞の。

**金崎**：そうですね、一応やり始めているところです。

**日高**：何かやる場とかできそうなんですか。

**金崎**：やる場所は、やっと確保できてきたんです。コロナがうつらないようにやっています。

日高：頑張ってください。笹山さん、お祭りとかは釜石のほうも結構縮小されたりとかしている状況があるかと思うんですが、どうですか、今後の見通しは。

笹山：今後の見通しはまるで立っていません。とりあえずコロナウイルスの収束を待つか、ワクチンが全員に行き渡れば、いくらかは活動できるのかなって感じですよ。ただし、この沿岸の郷土芸能団体は、各町内の家々を回って門打ちをして、そこでいただくお花が活動資金になっています。そのお祭りができない状態が続くと、だんだん団体自体が弱くなっていくという、悪循環になることが心配ですね。

日高：なるほど、そうですね。そういうところでいえば、震災とは違った形での継承の問題が、いま出てきているのかもしれないですね。コロナが何とか早く収束してくれることをまずは祈ることばかりになるんですけども。山本さん、今後の阪神虎舞はこういうことで頑張っていきますよ、みたいな展望なり、アピールとかありますか。私たちのこれからのこれを見てほしいみたいな。

山本：一年間コロナでお休みみたいな時間はもちろんあったんですけど、阪神虎舞という名前を掲げて活動するので、やっぱり阪神間という場所に根づいた形で活動とか発表をする場があったらいいなというのはずっと思っています。ふだん稽古しているのが新長田なんですけれども、活動を続けていくと知ってもらえる機会が多くなって、うちでやってくれないか、こっちでやってくれないかと声をいただくことも多くなってきたと実感してきたタイミングで、コロナという形になりました。これからステップを上げていけそうだなというところで。振り出しに戻るわけではないんですけど、今回すばらしい映像をつくっていただいたので、知ってもらえる機会になればいいと思っています。

あとはお囃子ですよ。笛と太鼓というのは、どうしても短期間では習得が無理なので、そこは気長に何とか方法を探っていければと。それと、やっぱり僕たちダンサーなので、実際に虎舞をやってみたい人とか、舞い手の仲間をふやしていけたらいいなと思っています。今、舞い手として活動しているのが7名です。今回の撮影のために1人新メンバーが入ってくれて7名

なんですけれど、人数が多いと絶え間なくダイナミックにできるなと思います。城山さんを見ているとどんどん押し寄せてくるように虎がやってくるみたい、すごくいいなと思うので、僕たちダンサーができることとして、しっかり底上げじゃないですけど、一番大事な部分としてこれからも稽古をさらに充実させていきたいなと思っています。

**日高：**ありがとうございます。今は、バネをしっかり溜めに溜めて、まさに跳ね上がる直前ぐらいまで溜めているという状態にまで、テンションは上がって来ているんじゃないかと思うんですけども、早く跳ね上げられるぐらいまでの社会状況になればいいかなと思っています。寺村さんは全然違う学問領域をされていますけども、今日はどうでしょう。復興展の実行委員でもあります、虎舞の芸能を見ていただいて、ここまでディスカッションを進めてきたんですが、どうでしょう。

**寺村：**私は実行委員の一人として展示作業に少しかかわらせていただきまして、展示されている虎舞のマネキンに着せた衣装とかをずっと見てきたんですけども、今日こういうふう実際に演舞されている姿を見て、本当に虎が生き生きと動いている、躍動していると思いました。展示自体は動かないですけども、それが実際にライブで動く様子について、展示をしていた側として感動しながら見させていただきました。

**日高：**展示のほうもかなり笹山さんと菊池さんと連絡をとり合っていたいていました。胴幕の張り方とか、背中に位置する頭をどのように形として見さないようにするのかというような、虎舞を演じるときに必要な体の使い方の要素を笹山さんや菊池さんに教えてもらいながら、ポージングを決めていきました。本当に大変な体勢でやっているんだというのがよくわかりました。金崎さんも非常に体がやわらかいんですね。

**金崎：**めっちゃめっちゃやわらかいですね。

**日高：**やっぱり柔軟性が非常に必要だなというのは、私もいろいろ感じながら展示をしました。それでは橋本さん、最後になってきたのですが、これからの阪神虎舞への応援メッセージじゃないですが、仕掛け人としての橋本さんの思いをご披露いただけますでしょうか。

## 阪神虎舞の意味

橋本：山本さんが言ってくれましたけども、やっぱり公演する場所はとても重要なのですが、今のところ廣田神社さんや少彦名神社さんは定期的に機会をくださっています。そういう自分たちの拠点になるような場所は大事にして、奉納という形で続けていけたらいいなと思っていますし、しつこいですけどもやはり阪神甲子園球場でやりたい。その時は城山さんにも来てもらって一緒に、なんていうのはおこがましいけども、亘さんをはじめ皆さんに来てもらって、一緒にできたらいいなと思っています。というのも以前、大槌まつりに参加させていただいて、山本さんと遠藤さんが実際に門打ちをさせてもらったんです。その時に城山のみんなが「阪神虎舞」という掛け声をかけてくれて、かなり感動したんですよね。あのような場がこっちでもできたらすごくいいなと思いました。ちょっとご紹介したいんですけども、昨日『日経新聞』で今日の公演のことも含めて大きな記事を西原さんという記者さんが書いてくださったんですけども、めっちゃいい内容なので読ませてください。「阪神虎舞のダンサー、遠藤リョウノスケは震災当時、環境デザインを学ぶ学生だった。授業の一環で被災地の支援に加わったが、「受け止め切れるものではなかったし、何もできなかった」という苦い経験がある。虎舞には民俗芸能への興味から参加したが、大槌を訪ねて当時の記憶がよみがえった。「今回は、自分の役割に確信がある」という。「『記憶を伝える』といっても、今はネットで簡単に情報を残せるし、歴史はいくらでも調べられる。ダンサーとして身体を通じて伝える方が、強くて柔軟な方法だと思う」。これかなと思うんですけども。記憶の風化に抵抗するといった時に、山本さん、亘さん、菊池さん、笹山さん、みんなそうなんですけども、体を通して風化に抵抗していく、体を通して大事なものを伝えていくということが、もしかしたら儂いように見えるかもしれないけども、強靱なあり方を示しているんじゃないかと思います。それが遠藤さんという舞い手の側から出てきたということ、そしてそれを新聞記者さんが拾ってくださったことが、私はとてもうれしくて。そういうことを肝に銘じてやっていけたらいいなと思っています。それからもう一

つ、今回は記憶の風化に抵抗するというアイデアだったのですが、実は少彦名神社の別所賢一宮司に言われてはっとしたことがあるんです。どこでも今は災害の時代ですから、いい言い方ではないかもしれないけれども、三陸沿岸でいつまた起こるかもしれない。こっちでも南海トラフが起こるだろうと言われたりしています。いつ、どこで、どんな大規模災害が起こるかわからないです。そうした時にある種の予防策として、実際に人間が携わる無形の文化財というんですかね。そういうものを動態的に保存するというのを、今回のプロジェクトでやったのかなとも思うんですよ。つまり、もし城山に何かあっても遠隔地で保存しているので、何かあった時に将来こっちで蓄積して努力して、精進して到達しているものをまた返せることもあるかもしれない。同じことはこちらでもあり得るわけです。遠いところにいながらつながって、芸能や祭りみたいな動くものを保存していく。そういう方法としても、この阪神虎舞の試みは、もしかしたら大きな革新性を帯びているのではないかと私は思います。それを別所宮司がちらっとおっしゃって、「ああ、なるほど、そんなこと考えてもいなかったけど」と思ったんですよ。なので、菊池さんをはじめ皆さん、懲りずにぜひ末永くおつき合いを続けさせていただいて、今日も結構渋めのコメントがありました。そういうのをこれからもしていただけたらうれしいと思っております

**日高:** 橋本さんのほうから、大変な災害が起こったときの予防策をしっかりと考えておかないといけないという話をいただきました。今回開催している特別展「復興を支える地域の文化—3.11 から 10 年」という展示会は、まさにそうしたところの試みの一つとして展示を制作しています。

10 年間、ここにいるメンバー、橋本さんとか笹山さんとかとともに、文化に対してどう向き合っていくのか、そもそも文化というのは我々の生活にどのような役割を果たしてくれるものなのか、芸能や、あるいは私が専門としているような有形の文化財的なものが、人にとってどのような意味を持つものなのかということについて、問いかけながら、議論を進めてきた 10 年でした。私のなかでの一つの結論としては、こうした日々の日常の当たり前前の出来事というものが、いわゆる文化的なものであり、結局何か大

変なことが起こったときに、そうしたことを振り返り、そうしたものをもう一回再開していくことが、復興への力になっていくのではないかというように考えて言います。そして、そうした事例を可能な限り実行委員や協力者のメンバーで集めてきて凝縮させたというのが、今回の展示の内容になっております。その最初の公演として、今回阪神虎舞という、まさにこれから新しい地域の文化をつくっていかうとしている皆さんに来ていただいて、見ていただくということをしました。私たちのこうした気持ちが、たくさんの人に見てもらって伝わっていけばいいなと思っておりますので、みんなの展示のほうも、今この画面を見ている皆さん、来ていただけたらと思います。

それでは最後にもう一度、振り返りという形で阪神虎舞の演舞を見ていただきたいと思います。これから見ていただく映像は、先ほど橋本さんの解説でもご紹介いただきましたアラン・シナンジャさんという西アフリカのトーゴから来日している、アフリカン・コンテンポラリーダンサーの方がドラムをたたきながら阪神虎舞とコラボレーションするという映像から始まります。まさにコンテンポラリーダンサーの集団である阪神虎舞の特徴的な形態としての演舞を皆さんにお届けしたいと思います。そしてもう一つ、虎舞のなかでも人気のある演目で、激しい動きをする「跳虎」の演目を、みんなのいろいろな場所でしてもらい、こういう見せ方をしたら楽しいかもということで編集した、「阪神虎舞——跳虎：みんなバージョン」という映像をつくってみましたので、そちらのほうもご覧いただいて、この阪神虎舞みんな公演を終わりたいと思います。

長い時間、視聴いただきまして、ありがとうございます。登壇者の皆様もありがとうございます。映像が終わりましたら、そのままフェードアウトしていきますので、私もこれで失礼させていただきます。

それでは皆さん、ありがとうございます。これからもみんなのほうも応援していただけたらと思いますので、よろしく願います。それでは映像をスタートします。さようなら。

(映像)